

しぜん
自然(1)すいせいせいぶつ さかな
水生生物・魚

水生生物の楽園

江戸川区は江戸川、荒川、海に囲まれており、内部にも中小河川が流れています。かつて、それらは青く澄んでおり、多くの魚がのびのびと泳ぎ、また、鳥たちがたわむれる豊かな自然が存在する環境でした。江戸川は現在でも私たちの大切な水道水として使われています。また、「淡水」「汽水」「海水」域に分かれ、多くの動物や植物がそれぞれの水域に生息しています。

1. 淡水にすむ水生生物—大河川

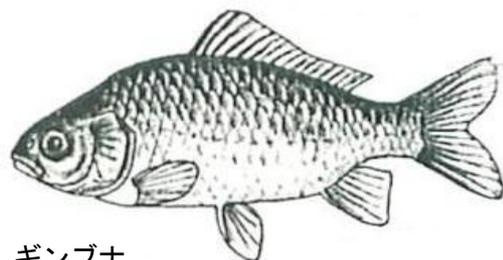
江戸川の水は水道水として使われているため、江戸川水門によって海水が混ざらないようされています。水門を境にして上流では淡水に生息する生き物が豊富で、特に大きな魚は多くいます。

コイ(コイ科)：流れのゆるやかなところに生息しています。大変長生きで、一般的には20年、長いものだと70~80年以上生きるコイもいます。全長は1m以上に成長する場合もありますが、ほとんどが60cm~80cmぐらいの大きさです。ゴカイやタニシなどの底生生物を食べています。江戸川のコイは、ほとんど人間によって放流された大和コイ、ヒゴイ、ニシキゴイ、カガミゴイ(ドイツゴイ)です。

フナ(コイ科)：童謡に歌われているように、昔は子供たちの遊び相手であり、江戸川が流れ込む大小河川に多くいます。江戸川の本流には30cmを超える尺ブナも棲んでいます。溜池には、以前はキンブナが数多くいましたが、近頃ではほとんどいないようです。食性は雑食であり、水草、貝類、昆虫類などさまざまなものを食べ、コイと似ています。



コイ

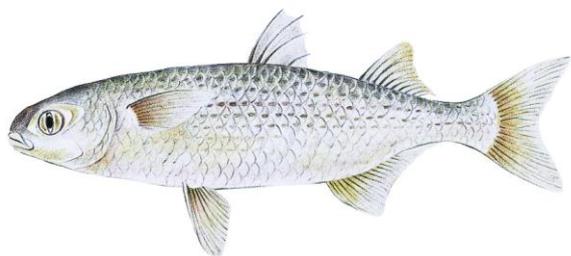


キンブナ

2. 汽水にすむ水生生物

ボラ(ボラ科)：夏の時期、江戸川ではよく群れになって泳いでいるところを見かけます。成長とともに名前が「オボコ」→「スバシリ」→「ハナ」→「ボラ」→「トド」と変わります。全体に青っぽく、目に^{しけん}脂瞼という脂肪の膜があり、冬になるとその膜で目を完全に覆います。食性は川底の泥中にあるプランクトンなどを食べます。

トビハゼ(ハゼ科)：東京湾から一時いなくなりましたが、最近になって葛西臨海公園や荒川の^{ひがた}干潟でその姿が見つかり、現在は少しずつ増えてきています。底生動物、水生昆虫、小魚などいろいろなものを食べる肉食性の魚です。



ボラ



トビハゼ

3. 海水にすむ水生生物

コノシロ(ニシン科)：小型のものは「コハダ」とよばれます。大きいものは30cmぐらいに育ちます。プランクトンを水ごと吸い込み、えらの一部で水と分離させてプランクトンだけを食べます。

スズキ(スズキ科)：関東では、「コッパ」→「セイゴ」→「フッコ」→「スズキ」のように、成長するにつれて名前が変わる魚です。スズキは、海の魚ですが、汽水域にも生息しています。食性は、海ではエビ類を多く食べ、河口ではゴカイなどの底生動物や小魚を食べています。



コノシロ



スズキ